

# 明代徐禎卿の江南・瀟湘への旅

—言志文学の決意—

鷺野正明

## はじめに

中国の詩は、詩人によって強弱の違いはあっても、その政治性を抜きにしては語れない。詩文を作る者は政治家・官僚を目指し、科擧では詩文の技量が試される。隠者であっても、社会と政治を見る眼は常に開かれている。弱い一個人の立場から権力者を「白眼視」する阮籍のような「詩人」もいた。

ところが明代の中頃から、呉（蘇州）を中心におよそ政治とは無関係に詩・書・画・演劇などに耽り日々を楽しく過ごす、いわゆる文人たちが出てくる。沈周（一四二八―一五〇九）を初め祝允明（一四六一―一五二七）、唐寅（一四七〇―一五三三）、文徵明（一四七〇―一五五九）などである。その一人に徐禎卿（一四七九―一五二一）がいた。

徐禎卿の生涯は呉で過ごした青春時代と科擧及第後の官僚時代とに分けられる。青春時代には文徵明や唐寅などと親しく交遊し、詩・書・画に親しみ、詩で一目置かれる存在であった。文徵明との詩の応酬<sup>1)</sup>、唐寅との書画を通しての交わり、文人達との「落花詩」の和韻<sup>2)</sup>などは風流韻事の極みとして高く評価されている。しかし、徐禎卿は、そうした文人達とは異なっていた。科擧を目指し、及第した二十七歳から亡くなる三十三歳まで官界の人となる。官場を目の当たりにして、文学に対する意識が変わり、また唐寅との間に誤解が生じることもあった<sup>3)</sup>。

徐禎卿の文学の新たな方向を導いたのは李夢陽（一四七二―一五二九）である。が、徐禎卿が自らの文学について明確に意識したのは、江南から瀟湘への旅を通してであった。この旅で、徐禎卿は李夢陽へ「重興獻吉書」（重ねて獻吉に与ふるの書）を寄せ、

「言志」文学への決意を明らかにする。そして、その実践の作品とも言える、五十韻の長編の詩「於武昌懷獻吉五十韻」（武昌に於て獻吉を懷ふ五十韻）を李夢陽に送る。

徐禎卿は二十七歳の弘治十八年（一五〇五）二月進士に挙げられ、三月廷試、大理左寺副を授けられた。科挙に及第した年の五月、孝宗が崩御し、武宗が即位する。翌、武宗の正徳元年（一五〇六）二十八歳の徐禎卿は、命を受け外史を編纂するため江南・瀟湘に赴く。外史は、蠻夷の凶書・文書を掌る役人である。

武昌での「重與獻吉書」（重ねて獻吉に与ふるの書）は、旅程と折々の感慨が詳しく記され、その当時の風景―徐禎卿の見た風景―と徐禎卿の「おもい」を知る好個の資料である。一年余りの旅で、徐禎卿は何を得て何を思ったのか。本稿では、その手紙の全文と関連の詩を読みながら、徐禎卿の江南・瀟湘への旅の足跡と心の軌跡を辿ってゆきたい。

## 一、京師から蘇州・会稽へ

外史編纂のための旅は、京師を出発して故郷の呉（蘇州）に立ち寄り、杭州から富春江を遡って鄱陽湖へ出、長江を遡って武昌へ、という行程である。

徐禎卿は、正徳元年（一五〇六）二月十三日、京師を出発し、

潞河から舟に乗り、直沽、衡水、汶水、沛、徐州を経、三月、故郷の蘇州に着いた。李夢陽への手紙「重與獻吉書」（重ねて獻吉に与ふるの書）には次のように云う。

僕 撰提格の歳の仲春を以て南に徂く。齊魯の郊を出で、淮沛の墟を経。平原を直視するに、蕭条たること千里。時に於て雉野に雉き、麦秀でて油油たり。日月の勤るを瞻、東山の嘆に感ず。宵眇として神を傷ましむると雖も、未だ以て心を振はして惕慮するに足らざるなり。既にして道は東呉を指し、故都を徬徨するも、棲棲焉として仲尼の魯を去るが若きなり。僕以攝提格之歲仲春南徂。出齊魯之郊、經淮沛之墟。直視平原、蕭條千里。於時雉雖於野、麥秀油油。瞻日月之勤、感東山之嘆。雖宵眇傷神、未足以振心而惕慮也。既而道指東呉、徬徨故都、棲棲焉若仲尼之去魯也。

「東山の嘆」は『詩経』邶風「東山」、道中の苦しさと帰郷の喜びを詠う。『詩経』では北方人の嫌う雨が描かれているが、徐禎卿は日の当たりにした風景を「蕭条たること千里。時に於て雉野に雉き、麦秀でて油油たり」と描く。見渡す限り蕭条とし、時に雉が鳴き、麦が茂っていて、まるで国が亡んだあとのようなのである。だから「宵眇神を傷ましむ」のであるが、これには劉瑾ら「八虎」の「亡国の振る舞い」が影を落としているであろう。しかし、「未だ以て心を振はして惕慮するに足らず」、おのき恐れるほど

ではない、とも言う。徐禎卿には、この頃まだ時勢を樂觀視する余裕もあつたのである。しかし、旅の途中で李夢陽が投獄されたことを聴き、武昌では「惕慮」して「於武昌懷獻吉五十韻」（武昌に於て獻吉を懷ふ五十韻）が作られるのである。

故郷の蘇州では、「故都を徬徨し」、治平寺に行ったり、山塘、虎丘に遊んだりしている。四月には唐寅の「王公出山図」（一名「拝相図」）に祝允明らと題詠したりしている。故郷で楽しんでいるように見えるが、しかし「登治平寺」（外集）では

只自迷人世 只だ自ずから人の世に迷ひ

空令歲月賒 空しく歲月をして賒ならしむ

と、俗世に迷いこみ、歲月が空しく過ぎ去る焦燥を詠い、「登半塘寺閣」（迪功集卷二）では

夙有山水慕 夙に山水を慕ふ有り

苦為形役拘 苦だ形の為に役拘せらる

と、陶淵明の「性本愛丘山」や「既自以心為形役」を踏まえ、官界での苦悩を吐露している。官界を去つて隠棲したいという思いは、この後何度も詠われる。詩的措辞ではなく、本心からの願ひであつたのだろう。政界ではすでに暗雲が垂れ込めていた。

任を帯びての旅ゆえ「棲棲焉」として仲尼の魯を去るが若きなり

と、孔子があわただしく故郷の魯を去つたように、自分も蘇州を去つた。「五月五日」（『正集』）の詩にはその頃の思いが次のよう

に詠われる。

怡悅經故園 怡悅 故園を經

芳菲值良節 芳菲 良節に値ふ

風俗猶自存 風俗 猶ほ自から存し

念我久離別 我の久しく離別するを念ふ

葵榴綴時穠 葵榴 綴りて時に穠く

蒲荷散幽冽 蒲荷 散じて幽冽たり

莫謂暄景滋 謂ふ莫れ 暄景滋しと

湘江坐鳴鳩 湘江 坐ろに鳴鳩

湘江へ行くことには氣が進まなかつたようである。「鳩」は無風流な鳥で、屈原の「離騷」に「恐らくは鳴鳩の先づ鳴きて、夫の百草をして之が為に芳しからざらしめん」とある。屈原は、鳴鳩が鳴くべき季節に先立つて鳴くことを、讒言が騒がしいことに喩え、そのためもろもろの花が落ち尽くし、香りがかおらないままに尽きてしまう、つまり忠直の士が罪過を被る、と暗示する。徐禎卿はそれを踏まえ、瀟湘ではすでに鳴鳩が鳴いていて不穩な情況であるという。今回の旅、外史編纂の命を受けての旅に氣乗りがせず、隠棲に心がかたむいたりするのは、そうした状況だったからである。

五月、錢塘江から、会稽山を望む。李夢陽への手紙。

乃ち錢唐（塘）に遵ひ、薄りて会稽を眺むれば、湖山を控へ

て以て郭と為し、江海を環りて以て池と為す。昔日の神宮・峽關（高い門）、椒房・綺榭の余、或いは魯甸（魯の郊外）に巋然（山が一つだけ聳えるさま）とし、徒らに丘夷（廢墟）を髣髴す。周道（大路）を顧瞻（顧みる）するも、之が為に哀しみを興さざる能はず。傍ら桐江の谿を引き、富春の渚を遡洄するに、豈に惟だ風を望んで其の人を思ひ、抑そも以て焉を楽しみて其の身を終ふ可けんや。

乃遵錢唐、薄眺會稽、控湖山以為郭、環江海以為池。昔日神宮峽關、椒房綺榭之餘、或巋然於魯甸、徒髣髴於丘夷。顧瞻周道、不能不為之興哀也。傍引桐江之谿、遡洄富春之渚、豈惟望風而思其人、抑可以樂焉而終其身矣。

都の跡は荒廢し宮殿は廢墟となっており、大路をふり返つては哀しい思いにとらわれる。

このころの詩、浙江駅での作（「浙江驛下作」）を見てみよう。

自嘆南浮客	自ら嘆ず	南の浮客と
崎嶇驛嶺遙	崎嶇	驛嶺遙かなり
川途澹斜日	川途	澹として斜日
鉦鼓遠揚橈	鉦鼓	遠く揚橈 <small>ようちやう</small> す
目勢含滄海	目勢	滄海を含み
山形折落潮	山形	落潮を折る
夷墟不可問	夷墟	問ふべからず

徒使旅心揺 徒らに旅心をして揺るがしむ

徐禎卿は、科擧及第後希望していた選館に入れられず、親友と別れて南方を放浪している。そのため「南の浮客」と詠い出す。その眼に映る風景は、淡い夕靄の立ちこめる川が遠くまで続き、時を知らせる鐘鼓が遠くから起こるわびしくさびしいものである。目には緑溢れる山々が映るが、その山は「落潮が折り重なるようだ」と言う。京師や蘇州では見られない異様な風景。落魄感が漂う。だから、夷墟、穩やかな村里には行くまい、行けば旅心がゆるぐから、と。

ところが、手紙では、桐江の溪水から富春の渚を遡る舟の中で、「風を望んで其の人を思ひ」「楽しみて其の身を終ふ」るだけではないのか、と、人としてこの世に生きて何を為すべきか、と疑問を抱き始める。

## 二、錢塘江を遡り彭蠡・廬山へ

徐禎卿はいよいよ錢塘江、すなわち富春江を遡る。桐廬瀨での作、「桐廬瀨中」（『外集』）。

千峰詰曲夾松湍	千峰詰曲	夾松の湍
石激波縈走迅灘	石は激し波は縈 <small>めぐ</small> る	走迅の灘
只道孤帆天際轉	只だ道ふ	孤帆天際に転ずると

哪知明月峽中看 哪ぞ知らん 明月 峽中に看るを

流れが速く屈曲した川。峽中に明月が耀いていたことも知らずに、舟が早瀬を抜けたことを喜んでゐる。激流に我を忘れたのであるうか。俗念も打ち払われたのであろうか。嚴子陵の祠に謁し、方山人を送った「送方山人」（迪功集卷三）。

嚴子灘頭花落時 嚴子灘頭 花落つる時

水清雲碧淨漣漪 水は清く 雲は碧く 漣漪淨し

孤舟相逐飛花去 孤舟 飛花を相ひ逐ふて去り

一日看山到武夷 一日 山を看て 武夷に到らん

詩形の違いもあるが、蘇州を離れるときや浙江駅での作と異なり、自然のなかに身をゆだね、沈鬱な思いも消えていったかのようである。方山人は方太吉、字元素、蘭溪の人である。

舟はさらに西南へと進む。李夢陽への手紙は、四字句を中心に対句を連ね歯切れがいい。

又西南に行き、穀水を渡り、常山を陟り、余干を越へ、弋陽

に沿ふ。山谿澗沚の浜、玉水激激なれば、則ち参差の毛、丹

碧の石有り。游儵翔泳し、白鳥棲み止まり、以て神を瑩きて

心を悦ばしむべし。横には彭蠡を涉り、仰いでは廬岳を瞻る。

其の波濤は則ち騰涌奔伏して、日月に噴薄し、其の峰嶸は則ち盤迴峭絶して、巨に霄漢に接す。香炉五老の形、瀑布青峽の觀、特に卓詭と為す。靈芝異草、山に彌れ谷に布き、金符

玉冊、幽を窮め玄を極む。信に赤霄（赤い雲のたなびく）の神都、老氏の玄宮なり。

又西南行、渡穀水、陟常山、越餘干、沿弋陽。山谿澗沚之濱、玉水激激、則有參差之毛、丹碧之石。游儵翔泳、白鳥棲止、可以登神而悦心也。横涉彭蠡、仰瞻廬嶽。其波濤則騰涌奔伏、噴薄日月、其峰嶸則盤迴峭絶、巨接霄漢。香爐五老之形、瀑布青峽之觀、特為卓詭。靈芝異草、彌山布谷、金符玉冊、窮幽極玄。信赤霄之神都、老氏之玄宮也。

舟は谷水を渡り、常山を経、余干を越え、弋陽に沿って鄱陽湖を横切り、廬山を仰ぎ見る。「游儵」は「莊子」秋水篇を踏まえる。何物にもとらわれないのびのびとした心持ち。隠棲にაცოგაღღღღいた徐禎卿は「赤霄の神都、老氏の玄宮」にやってきた感慨にひたる。

六月、廬山に登った。「避雨五老峰下」「廬山」「曉下廬山」の詩がある。「曉下廬山」（「正集」）は、東林寺を訪ねての帰り、月が虎溪を照らしてくれ無事に橋を渡ることができた、とのびのびとした思いを詠う。

下山颺鼠啼 山を下れば颺鼠（むささび）啼き

藤竹使人迷 藤竹 人をして迷はしむ

多謝東林月 多謝す 東林の月

殷勤過虎溪 殷勤（親切にも照らしてくれ）虎溪を過ぐ

心の充足を詠う一方で、鄱陽湖を詠った「彭蠡」〔迪功集〕巻二〕では次のように、心のモヤが詠われる。

茫茫彭蠡口 茫茫たり 彭蠡の口みなと

隱隱鄱陽岑 隱隱たり 鄱陽の岑

地湧三辰動 地湧いて三辰（日・月・星）動き

江連九派深 江連なつて九派（九つの支流）深し

揚舲武昌客 揚舲（揺れ動く舟） 武昌の客

興發豫章吟 興發（興が起る） 豫章の吟

不見垂綸叟 見ず 綸を垂るるの叟

煙波空我心 煙波 我が心を空しうす

「豫章」は江西省の郡名。「豫章吟」は陸機「泛舟清川渚」、謝靈運「出宿告密親」などの別離を詠う楽府詩。揺れ動く舟に乗る武昌の旅人は別離の悲しい思いにとらわれ、心が空しくなる。手紙では、何物にもとらわれないのびのびとした心持ち、隱棲の地にやつて来た喜びを表現していた。が、この詩では、釣り糸を垂れ悠悠自適に暮らす老人もいず、景色を見晴るかすこともできない「煙波」が漂っている。

李夢陽に宛てた長文の手紙は、これまで見てきたように、旅程と心の軌跡を述べるが、次の段落では「全楚の地勢」のすばらしさを述べ、それを承けて「民の俗・人の世」を歎く構成になっている。それ故に、この段落では、何物にもとらわれないのびのび

とした心持ち、隱棲の地にやつて来た喜びを表現しているのである。

一方、詩では、旅愁や孤独感を素直に詠う。潯陽に停泊した次の詩もそうである。「夜泊潯陽」〔外集〕。

草色潯陽江 草色 潯陽江

鐘前武昌客 鐘前 武昌の客

獨坐秋風來 獨り坐せば秋風來たり

蒹葭時撼撼 蒹葭時に撼撼たり

【詩經】「蒹葭」に「蒹葭蒼蒼として、白露霜と為る。所謂伊の人、水の一方に在り」とある。「蒹葭」は異郷の地で友を思うことの暗示である。「撼撼」は蒹葭の触れあつて鳴る音。

七夕は風雨だった。「七夕江上風雨有懷」〔外集〕

潯陽江頭人未歸 潯陽江頭 人未だ帰らず

潯陽音信雁來稀 潯陽の音信 雁來たること稀なり

不知風雨今何夕 知らず 風雨 今何の夕ぞ

唯見雙雙鳥鵲飛 唯だ見る 双双 鳥鵲の飛ぶを

七夕の夜には牽牛と織女の二人が会えるように鳥鵲が相連なつて橋を架けるのに、今日は風雨のため橋も架けられず、二羽の鳥鵲が空しく飛んでいる、と会いたい人と会えない悲しさを詠う。

「潯陽」「武昌」の語から、この辺地に左遷され、あるいは放浪した悲劇の文人が立ち現れてくる。

### 三、武昌にてー全楚の地勢ー

徐禎卿を乗せた舟は西に九江を遡り、潯陽、江夏を経て、武昌に到着した。季節は秋。少年時代を過ごした蘇州への思いを強くしている。「在武昌作」(自訂『迪功集』卷二)。

洞庭木葉下 洞庭 木葉下り

瀟湘秋欲生 瀟湘 秋 生ぜんと欲す

高齋今夜雨 高齋 今夜の雨

獨卧武昌城 獨り卧す 武昌城

重以桑梓念 重ぬるに桑梓の念を以てし

凄其江漢情 凄たり其れ江漢の情

不知天外鴈 知らず 天外の鴈

何事樂南征 何事ぞ 南征を樂しむ

旅愁と望郷のおもいは、いよいよ澄み、表現はますます清らかになっていく。詩と手紙文との相違は前節でも触れたが、手紙では、旅愁・孤独感は見られない。

手紙文の中核をなす部分では「全楚」の状況を概観する。対句による簡潔で歯切れのよいリズム、素朴でかつ力強い。六朝の「四六駢麗文」、唐宋の「古文」を経てたどり着いた文体、四六文と古文を融合して編み出した「復古の文」と言ってよいのではないか。

この段落部分は、さらに三節に分けられる。第一節は楚の地の概要。第二節は楚が天の中心に位置し、天帝が居るにふさわしい地であること。第三節は楚の水陸の自然と気候、物産の豊かなこと、を述べる。

又西して九江を遡り、南のかた全楚を望む。夫れ其の巴蜀の喉舌を扼し、呉会(呉と会稽すなわち呉と越)の上流に抛り、五嶺(大庾、始安、臨賀、桂陽、揭陽の五嶺)の門戸に通じ、雍梁(雍州と梁州)の要枢に接す。此れ其の大勢なり。

又西遡九江、南望全楚。夫其扼巴蜀之喉舌、據吳會之上流、通五嶺之門戸、接雍梁之要樞。此其大勢也。

楚は巴蜀の喉もとをおさえ、呉と越の上流に位置し、大庾、始安、臨賀、桂陽、揭陽の五嶺に通じ、雍州と梁州の要枢に接している。と、まず楚の位置関係を明らかにする。広大な地域である。その中心には衡陽山があり、表門にあたる位置に武当山がある、と次の段落。

若し乃ち鎮むるに衡陽の阜を以てし、表するに武当の山を以てすれば、五峯(紫蓋、天柱、芙蓉、石廩、祝融の五つ)森拔し、三門(太岳にある天に通じる門)凌啓し、雲霞綯繪、紫氣燭耀す。其の中に四候蚤に暮れ、七曜(日・月・金星・木星・水星・火星・土星)運り行き、往往人間と殊に別なり。爰に黄金の堂、白玉の所有り、琉璃を鋪と為し、檀桂を柱と

為し、制は天居に倅く、勢は海嶽を轢し、目の希に見る所に  
して、窈窕として説き難し。

若乃鎮以衡陽之阜、表以武當之山、五峯森拔、三門凌啓、雲  
霞絢繪、紫氣燭耀。其中四候蚤暮、七曜運行、往往與人間殊  
別。爰有黃金之堂、白玉之所、琉璃為鋪、檀桂為柱、制倅天  
居、勢轢海嶽、目所希見、窈窕難説。

もし衡陽山を楚の地の鎮めとし、武當山を表門とするなら、紫  
蓋、天柱、芙蓉、石廩、祝融の五峯は高く聳える柱に相当する。  
天に通じる三つの門が開いて、雲霞は絢爛と輝き、紫の気が明か  
るく耀く。その中を四季が巡り、日・月などの七曜が運って、人  
の世とはまったく様相を異にしている。ここに黄金の堂、白玉の  
室があり、琉璃を敷石とし、梅檀や蘭桂の香木を柱とし、構えは  
天子の居に等しく、勢は海嶽を侵して、そのすばらしさは窈窕と  
して説き難い。

天にも等しい楚。この楚に拠点を置いたなら、天下を得ること  
もできる天然の要害である、ということでもある。

又江漢の波、沅湘の流れ、洞庭の湖、雲夢の沢有り。千条万  
派、原を混じ塗を同じうし、縦貫脈理、其の間に経帯し、極  
望浩漫、際天海に薄る。陽春猷じて草芳しく、涼風至りて兼  
葭落つ。猿子噉嘯し、鴻鴈羣を成し、魚龍倏忽（風雨が忽ち  
起こり）、嗚晦互に分ち、以て天地の変化を觀、時序の榮

悴を驗す可きなり。故に水族の饒かなるを徴し、材木の珍な  
るを萃む。舟楫の利及び畋漁の樂しみを論ずれば、九州の内  
未だ此を踰ゆる者有らざるなり。

又有江漢之波、沅湘之流、洞庭之湖、雲夢之澤。千條萬派、  
混原同塗、縦貫脈理、經帶其間、極望浩漫、際天薄海。陽春  
猷而百草芳、涼風至而兼葭落。猿子噉嘯、鴻鴈成羣、魚龍倏  
忽、嗚晦互分、可以觀天地之變化、驗時序之榮悴也。故徵水  
族之饒、萃材木之珍。論舟楫之利及畋漁之樂、九州之内未有  
踰於此者也。

また江漢の波、沅湘の流れ、洞庭の湖、雲夢の沢がある。千条  
万派、源も流れも混ぜ合わさり、連なり続き、その間に水が湛え  
られ、遠く望めば浩蕩漫漫とし、天の際は海に迫るほどである。  
春には暖かな光がさして草は芳しく萌え、秋には涼しい風が吹い  
て兼葭が散る。猿が吼え叫び、鴻鴈が羣をなし、風雨が忽ち起こ  
り、晴れと雨、昼と夜がはっきりしている。ここから天地の変化  
を察することができ、時序の移り変わりの兆候を捉えることがで  
きる。水に住む魚類も多く、めずらしい材木も多い。水運の利と  
狩や漁の樂しみを論ずるなら、九州の内での楚を越える所はな  
い。

この楚には南北を結ぶ漢水や沅湘の川がある。また洞庭湖、雲  
夢の沢があり、食糧や物産が多く、中国のなかで最もよい所だ、



と云う。

#### 四、民の俗・人の世

天下の要害で風光明媚、物産も豊かな優れた楚の地方であるが、民の俗・人の世はどうであったのか。李夢陽への手紙は、次のように続く。

然れども其の民の俗苦だ瘠せ、利を尚び義を薄んず。戸に困廩（穀物倉庫）の食無く、人に相ひ固きの心無し。雑ふるに山夷の軽躁動き易きを以てし、久安長治の国に非ざるなり。又其の山川四要を包絡し、固より武を用うるの場、争ひを聚むるの地なり。故に東のかた樊口を望めば、則ち周瑜の雄を慕ひ、西のかた峴山を顧みれば、則ち叔子の恵みに感ず。載ち荆門を觀れば、則ち昭烈（劉備）の績を悲しみ、眺を中原に極むれば、則ち武穆（岳飛）の忠に痛む。山河は昔是なるも、人物は已に非なり。心は傷み嘆じ、悽として其れ漣如たり。嗟乎死生は命なり、理乱は時なり。命に洩り有るも志に漣り無く、時に遘ふべきも身は逮ばず、此れ屈原の江夏に流亡する所以にして、賈誼の長沙に憂傷する所以の者なり。頼む所は豪賢發憤して、帶礪（川と山）に映じて以て名を垂れ、章逢（儒者）道を楽しみて、竹帛を仮りて以て志を昭らかに

せんことを。生人の業、為に朽ちざるを庶ふのみ。

然其民俗苦瘠、尚利薄義。戸無困廩之食、人無相固之心。雜以山夷輕躁易動、非久安長治之國也。又其山川包絡四要、固用武之場、聚爭之地。故東望樊口、則慕周瑜之雄、西顧峴山、則感叔子之惠。載觀荆門、則悲昭烈之績、極眺中原、則痛武穆之忠。山河昔是、人物已非。心傷嘆矣、悽其漣如。嗟乎死生命也、理亂時也。命有洩而志無涯、時可遘而身不逮、此屈原所以流亡於江夏、賈誼所以憂傷於長沙者也。所頼豪賢發憤、映帶礪以垂名、章逢樂道、假竹帛以昭志。生人之業、庶為不朽耳。

民の俗は劣り、利を尊び義を軽んじ、食糧庫には食糧もなく、人に恒心がなく、野蠻で軽率、長く平和を保てる国ではなかった。また要害の地であるため、たえず戦場となってきた。東の樊口を望んで三国呉の周瑜の雄を慕い、西の峴山を顧みては晋の羊祜（叔子）の墜涙碑の故事を思い、荆門を觀れば蜀の劉備（昭烈）の事績を悲しみ、中原を遠く眺めると宋の岳飛（武穆）の忠に心を痛める。山河は昔から変わらないが、人はすでにいない。死と生は命運であり、理と乱は時運である。命に限りはあるが志は限りがない。時運に廻り逢っても身は及ばない。屈原が江夏に放浪して亡くなったのも、賈誼が長沙に流され憂いに沈んだのも、そのためである。頼む所は、豪賢が發憤して山水に託して名を垂れ、

学者が道を楽しんで竹帛を仮りて志を昭らかにせんことを。今を生きている人の営みが朽ちないことを庶うだけだ。

はかない人の命と人の世に思いを致し、文学の永遠性に期待するのである。二十歳ころ、徐禎卿は文学への思いがなくなつたら、仏教に帰依しよう、などと言っていたが、官僚となり、雄大な楚の地を旅し、歴史を顧みて、文学のあるべき姿をあらためて認識したのである。

## 五、聊か子長の風を希い虞卿の志を庶幾う

### 一言志の決意

では、詩文は具体的にどうあるべきか。李夢陽への手紙は前段を承け、次のように結ぶ。

僕自ら惟へらく、卓犖の材無く、礪鐔の用寡く、進んでは眉を天下に掲ぐる能はず、退いては心を丘壑に甘んずる能はず、徒らに情を江海の間に放ち、志を宇宙の表に抗ぐ。將に以て奇を搜り秘を獵し、華を咀み靈を納れんとすれば、則ち水土にして函蘊し、景曜に法りて以て文を摘べ、聊か子長の風を希ひ、虞卿の志を庶幾はん。乃ち于役の云豫を知り、茲に之に遊ぶこと豈に徒らならんや。惟だ是れ足下と吾と懐を同じうするも、時の齟齬するに遭ひて、良図遂げられず、膝を空

林の中に抱き、神を窮跡の境に棲ましむ。搶榆を之れ樂しと為すと雖も、固より大鵬の逍遙を知るなり。故に聊か其の略を述べ、以て抵掌に當つ。方に簿牒有れば、言ふ所を尽くさず。

僕自惟無卓犖之材、寡礪鐔之用、進不能揚眉於天下、退不能甘心於丘壑、徒放情於江海之間、抗志於宇宙之表。將以搜奇獵秘、咀華納靈、則水土而函蘊、法景曜以摘文、聊希子長之風、庶幾虞卿之志。乃知于役之云豫、茲遊之豈徒哉。惟是足下與吾同懷、遭時齟齬、良圖弗遂、抱膝空林之中、棲神窮跡之境。雖搶榆之為樂、固知大鵬之逍遙也。故聊述其略、以當抵掌。方有簿牒、不盡所言。

徐禎卿は云う、自分は「卓犖の材」、ずばぬけた才能もなく、「礪鐔の用」、やいばを研ぎ磨いたような鋭さもなく、したがって進んでは官界で活躍することもできず、退いて山野に隱棲することもできない。いたずらに情を江海の間に放ち、志を宇宙の間に漂わせている。奇を探り秘を涉獵し、華を嚼み靈を我がものにしよと、山水を観察し、自然に法って文を綴り、いささか「子長」司馬遷の『史記』の風韻と、「虞卿」の『虞氏春秋』の志に倣いたい。旅は楽しいもので、無駄ではない。あなた（李夢陽）と思いは同じであるが、時宜に逢わず、はかりごとも遂げられず、空しく空林に膝を抱き、心を奥深い境地に棲まわせている。榆枋に到るまでの小旅行も楽しいが、もとより大鵬の逍遙の志も知って

いる。そこで聊か旅の行程を略述し、楽しみに供した、と。

朝廷では、武宗の奇行が止まず、政治を補佐した劉瑾を筆頭とする「八虎」が専横を極めていた。糾そうとした李夢陽は獄に下された。もとより詩文を能くし科擧を目指す者は、豊かで平和な世の中を実現させようと望みを抱く。自らの手で実現できないならば、その思いを詩文に託すことが責務と意識されていた。李夢陽は官場に留まり実行に移したが、徐禎卿は楚へと追いやられた。が、楚の旅によって、徐禎卿はその責務をあらためて認識したのであった。

## 六、李夢陽を思う旅中の詩

手紙は一篇の論文であり、徐禎卿は李夢陽に向かって「言志」を明らかにした。一方で、個人の思いを詠う詩は、これまでの引用詩からも窺えるように、情を発露し、心の平衡を保つ重要な働きがあったと思われる。別離の詩となればさらに抒情性が前面に出てこよう。旅中、李夢陽を思う詩は九首作られている。詩題を挙げると以下のようである。

① 往歲中秋、與獻吉子容飲、幽吟於月下。飛蓬一矢、載離寒暑、今茲之夕、時異事非、對月舉觴、悵然有作（五言律詩

『外集』）

② 九日期登大慈恩寺閣不果寄獻吉（五言排律『迪功集』）  
③ 秋日懷李郎中及邊熊二君子五首（五言律詩『迪功集』）  
④ 於武昌懷獻吉五十韻（五言古詩『迪功集』）  
⑤ 寄獻吉（七言律詩『迪功集』）  
④⑤は正徳二年（一五〇七）の作である。徐禎卿は瀟湘地方で年を越し、正徳二年（一五〇七）四月いつたん蘇州に行つてから十月に京師に戻っている。

①「往歲中秋」の作、題名中の「載離寒暑」は『詩經』小雅「小明」の「二月初吉、載離寒暑」を踏まえる。一年が忽ち過ぎ友人が離ればなれになることを言う。

今夜中秋月 今夜中秋の月

清輝異往時 清輝往時に異なる

終知萬古色 終に知る 萬古の色

不受片雲欺 受けず 片雲の欺くを

走魅應含淚 走魅 応に涙を含むべし

潛蛟一奮鬣 潛蛟 一に鬣を奮ふ

遙憐澤畔客 遙かに憐む 沢畔の客の

千里正相思 千里正に相思ふを

同じ中秋の月でも今見ている月の清輝は去年と違う。萬古の愁いを帯び、片雲に隠されることもなく愁いは募るばかり。愁いのために走魅はきつと目に涙をため、潛蛟も鬣を振るわせているに

違いない。沢畔をさまよう旅人は千里かなたの友人を思っている。

②は九月九日に大慈恩寺で会う約束をしたのに果たせず、会えなかつた無念を詠う。十六句の排律である。「太白・摩詰の境に合うに似たり」(『皇明詩選』韓文の評)と評されている。

悵憶青蓮宇 悵として憶ふ 青蓮の宇

今朝黃菊開 今朝 黃菊開く

遙知遠公笑 遙かに知る 遠公の笑ふを

不見白衣來 見ず 白衣の來たるを

窈窕人天閣 窈窕たり人天の閣

崢嶸日月迴 崢嶸として日月迴かなり

山川紛楚望 山川 紛として楚を望み

城闕動秋哀 城闕 動もすれば秋に哀しむ

峴首羊公石 峴首羊公の石

淮陰戲馬臺 淮陰戲馬の台

風烟那可即 風烟那んぞ即く可けん

逸興杳難裁 逸興杳として裁し難し

強負登樓作 強ひて登樓の作を負ひ

虛傳落帽才 虚しく落帽の才を伝ふ

此時遙獨酌 此の時遙かに独り酌み

念爾重悠哉 爾を念ひて重ねて悠なる哉

大慈恩寺では今朝菊の花が開いたことであろうが、行かれない

のが恨めしい。「遠公」、慧遠とも言うべきあなたは笑っているであろうし、「白衣」、在家の私の行けないことを知って残念に思っているであろう。「人天の閣」、衆生の天に聳える慈恩寺塔は美しく、その高い塔には日や月が懸かっていることだろう。と、仏教用語を多用して李夢陽と塔を詠う。以下は自分のいる瀟湘を詠う。

山川の多い楚を望み、城闕を見て秋を哀しむ。襄陽の峴首山には羊祜の堕涙碑があり、淮陰には項羽の築いた戲馬の台があるが、美しい景色をめでもなく、逸興を詩にすることもできない。自分は「登樓の賦」を作った王粲のような才能があると言われ、落帽の故事の孟嘉のような才能があると言われてきたが、それは枉げられて言われ、空しく伝えられたものである。今は遙か瀟湘の地で独り酒を酌み、あなたを思つて悲しみを重ねている。

別離の情が銜いもなく素直に詠われている。以下も同様である。  
③「秋日懷李郎中及邊熊二君子五首」の其の一では(頷聯から尾聯)

山川思不極 山川 思ひ極まらず

雲樹莽蒼蒼 雲樹 莽蒼蒼たり

對酒知時變 酒に対して時の変ずるを知り

看花感別長 花を看て別れの長きに感ず

如何霜後雁 如何ぞ 霜後の雁

猶未達瀟湘 猶ほ未だ瀟湘に達せず

と長く別れていること、便りのないことを言い、其の二では（首  
聯・頷聯）

借問關中友 借問す 関中の友

新詩近轉多 新詩 近ごろ転た多からん

風煙興難盡 風煙 興尽くし難く

揺落意如何 揺落 意如何ん

と近況を問い、其の三では（頷聯）

未妨文字癖 未だ妨げず 文字の癖

祇益簿書忙 祇だ益ます簿書忙しからん

と李夢陽の繁忙ぶりを気づかっている。其の四は「邊廷實」邊  
貢（一四七六〜一五三二）を思つてともに詩を作り合いたいこと  
を、其の五では「熊子」熊卓はどうしているかと心配する。

④の「寄獻吉」では

豈是乘桴客 豈に是れ桴に乗る客

棲棲楚水陽 棲棲たり 楚水の陽

故人多放斥 故人多く放斥せられ

吾道轉淒涼 吾が道転た淒涼

寵辱今如此 寵辱 今此くの如し

沈憂不可忘 沈憂 忘る可からず

と、友人が多く排斥されたことに触れ、やるせない思いを詠う。

⑤は李夢陽が草堂を築いた知らせを聞き（尾聯）

荒村豺虎眠難穩 荒村 豺虎 眠り穩やかなり難し

好共滄江學釣魚 好し共に滄江に釣魚を学ばん

と政界の動きと友の災難を思い、ともに隠棲しようと言う。徐  
禎卿にとつて李夢陽の存在がいかに大きかったか窺えよう。

「言志」とは社会とどのように対峙するかという人生哲学に通  
じる。本稿で取り上げた「重與獻吉書」（重ねて獻吉に与ふるの書）  
は、散文における「言志」の一つの形であり、「於武昌懷獻吉五十韻」  
（武昌に於て獻吉を懷ふ五十韻）は、韻文における「言志」の一  
つの形である。どちらも李夢陽がいなくては生まれなかった。

おわりに 「竹帛を仮りて以て志を昭らかにす」

詩は情を抒べるものであるが、では、徐禎卿は、抒情と言志と  
をどのように両立させ、実践していったのであろうか。

官界に身を置く徐禎卿は、科擧の及第者がそうであるように、  
よりよい社会の実現を目指した。思いは李夢陽も同じである。朝  
廷では劉瑾を頭とする「八虎」が跋扈し、徐禎卿が江南・瀟湘へ  
赴任している間に、李夢陽は獄に下された。

徐禎卿は、旅立ちの当初は、官場に留まることのできない不遇  
感と官界の不穏な動きとによって愁いを懷き、時に隠棲の思いを  
吐露していた。が、旅を続けて壮大な自然に触れ、「風を望んで

其の人を思ひ「楽しみて其の身を終ふ」るだけでよいのか、人としてこの世に生きて何を為すべきか、と疑問を持ち始める（第一節）。

さらに、武昌では、楚の国が地理的にも歴史的にも枢要の地で風光明媚であるが、戦が繰り返され、民の俗の卑しさと人の世のはかなさに思いを致し、個人的な愁いから国家に対する憂いを強く抱くようになった。左遷にも等しい瀟湘への赴任によって、徐禎卿は志を遂げるには文学に頼るしかなく、「聊か子長の風を希い、虞卿の志を庶幾う」と、「言詩」の文学をあらためて認識したのであった。（第五節）

「言志」の文学の認識はすでに漢代の『詩経』解釈にあらわれ、「志を言う」という意識は多くの詩人達の共有するものであった。徐禎卿が特に珍しいというのではない。が、明代蘇州の文人社会に育った徐禎卿がこの「言志」を意識したことは注目に値する。では具体的にどのような詩によってそれを実現するのか。李夢陽の手紙には、次のように言っていた（第四節）。

頼む所は豪賢発憤して、帶礪（川と山）に映じて以て名を垂れ、章逢（儒者）道を楽しみて、竹帛を仮りて以て志を昭かにせんことを。生人の業、為に朽ちざるを庶ふのみ。  
所頼豪賢發憤、映帶礪以垂名、章逢樂道、假竹帛以昭志。生人之業、庶為不朽耳。

儒者であれば、「竹帛を仮りて以て志を昭らかにす」ることがその願いである、と。

徐禎卿は、文学理論を展開した『談藝錄』で、詩の理想を「卿雲」「江水」「烝民」「麦秀」などの古歌と、その流れをくむ『詩経』雅頌・国風に求めている。これらはみな詠歌されていた。

先王之を宮徴に協へ、之を簧絃に被むらしめ、之を郊社に奏し、之を宗廟に頌し、之を燕会に歌ひ、之を房中に諷す。蓋し之を以て以て天地を格し、鬼神を感ぜしめ、風教を暢し、庶情に通ずべし。此れ古詩の大約なり。

先王協之於宮徴、被之於簧絃、奏之於郊社、頌之於宗廟、歌之於燕會、諷之於房中。蓋以之可以格天地、感鬼神、暢風教、通庶情。此古詩之大約也。

「情」から生まれた詩は、先王が宮徴（メロデー）に合わせ、て楽器で演奏できるようにし、宗廟で頌し、宴会で歌い、房中で諷した。それ故に、天地を格し、鬼神をも感動させ、風教を広め、さまざまな情に通じることができた、と。

詩と音楽とが結びついた古代の詩は、雅頌と国風に受け継がれ、更に次のように発展したと言う。

漢祚わんそくつて鴻朗、文章作すこと新たなり。安世の楚声は、温純厚雅、孝武の樂府は、壯麗宏奇。縉紳先生、感な従ひ附きて作る。迹を古風に規ると雖も、各おの剖劂を懐く。美なるか

な歌詠、漢の徳雍揚たり、雅頌の嗣と為すべきなり。夫の興懐触感するに及び、民各おの情有り、賢人逸士、下里に呻吟し、棄妻思婦、中閨に嘆詠し、鼓吹して軍曲を奏し、童謡閨巷に発するは、亦た十五國風の次なり。

漢祚鴻朗、文章作新。安世楚聲、溫純厚雅、孝武樂府、壯麗宏奇。縉紳先生、咸從附作。雖規述古風、各懷剖劘。美哉歌詠、漢徳雍揚、可為雅頌之嗣也。及夫興懷觸感、民各有情、賢人逸士、呻吟於下里、棄妻思婦、嘆詠於中閨、鼓吹奏乎軍曲、童謡發於閨巷、亦十五國風之次也。

安世の楚聲と孝武時代の樂府は、それぞれ溫純厚雅、壯麗宏奇という特色があり、縉紳先生たちはみなその古風にならって詩を作り、各々が剖劘をいだいていた。その詠歌は美しく、漢の徳は雍揚とし、雅頌を継ぐものであった。一方、國風を継ぐものは、民はそれぞれ情によつて詠った。賢人逸士は下里に呻吟し、棄妻思婦は中閨に嘆詠し、軍曲を鼓吹演奏し、童謡が閨巷に起こつた、と。

『談藝錄』は弘治十一年（一四九八）徐禎卿二十歳のときに書き上げられていた。「竹帛を仮りて以て志を昭らかにす」る詩は、『詩経』雅頌・國風やそれを継ぐ樂府である。徐禎卿は、官界に身を置き、瀟湘に旅することによってその重要性を切実に認識したのである。徐禎卿の樂府は、「志を言う」実践的な作品として、

自選詩文『迪功集』の巻頭に、詩の配列に意を用いて置かれてい<sup>(17)</sup>る。

徐禎卿の樂府以外の詩は、瀟湘の旅を通じてより透明感を増した。李夢陽を思う詩は、情の溢れる素朴な詩である。徐禎卿の詩評によく言われる「清婉」<sup>(18)</sup>詩が多くなるのもこの旅中である。以下に引用する詩も「清遠」あるいは「清婉」と評されるものである。瀟湘へ向かう途中、巴渝（四川省）へ行く同年の蕭若愚（蕭世賢、字若愚）を見送った詩「送蕭若愚」（『迪功集』卷三）。

送君南下巴渝深 君の南に下るを送れば 巴渝深し

予亦迢迢湘水心 予も亦た迢迢 湘水の心

前路不知何地別 前路知らず 何れの地にて別れん

千山萬壑暮猿吟 千山万壑 暮猿吟ず

諸家の評は以下のものである。

・『皇明詩選』 輓文「江寧（王昌齡）・太白（李白）の間に在り（在江寧太白之間）」

・『明詩別裁集』「何大復の太華終南の篇と双美と云ふべし（與

何大復太華終南之篇可云雙美）」

・宗子相「直ちに是れ供奉（李白）・龍標（王昌齡）の風調なり。

（宗子相云、直是供奉龍標風調）」

・徳啓「清遠能く太白の妙境を得たり（清遠能得太白妙境）」

李白や王昌齡の詩の特色は、個性を捨象し、テーマをより突

き詰めて純化している点にある。理屈を述べず、感情を詩句の中に封じ込め、詩的空間にその完結性をもとめる詩風である。徐禎卿の詩の特色もまたそこにある。

徐禎卿は『談藝録』で「清圓」を詩の理想としたが、瀟湘への旅を経て、詩はより研ぎ澄まされて清新さを増し円やかになったと言えるだろう。

### 注

- (1) 拙稿「明代徐禎卿の江南時代―文徵明との交遊と洞庭唱和詩―」(『国士館大学人文学』3号、二〇一三年三月)
- (2) 拙稿「徐禎卿―江南時代の詩―」(『中國古典研究』第二十七號、一九八二年十二月)
- (3) 拙稿「徐禎卿―唐寅との交遊―」(『漢学紀要』第十八號、二〇一六年三月)
- (4) 拙稿「徐禎卿の『於武昌懷獻吉五十韻』について」(『漢学紀要』第十七號、二〇一五年三月)
- (5) テキストは、『迪功集』(欽定四庫全書、電子版)に拠り、適宜『徐迪功詩集四卷外集三卷附録一卷』(大立出版社、一九八一年)、『徐禎卿全集編年校注』(范志新編年校注、人民文学出版社、二〇〇九年)を参酌する。なお本論中『正集』と記すのは徐禎卿自選の『徐

迪功詩集』を指す。

- (6) 『詩経』爾風「東山」に「我徂東山、惓惓不歸。我來自東、零雨其濛。我東曰歸、我心西悲。制彼裳衣、勿士行枚。蜩蝻者蠲、烝在桑野。敦彼獨宿、亦在車下。／我徂東山、惓惓不歸。我來自東、零雨其濛。果臝之實、亦施于宇。伊威在室、蠨蛸在戶。町疃鹿場、熠燿宵行。亦可畏也、伊可懷也。／我徂東山、惓惓不歸。我來自東、零雨其濛。鸛鳴于垤、婦嘆于室。洒掃穹窒、我征聿至。有敦瓜苦、烝在栗薪。自我不見、于今三年。／我徂東山、惓惓不歸。我來自東、零雨其濛。倉庚于飛、熠燿其羽。之子于歸、皇駁其馬。親結其縢、九十其儀。其新孔嘉、其舊如之何。」とある。
- (7) 注(4)参照。
- (8) 陶淵明の「歸園田居」其一に「少無適俗韻、性本愛丘山。誤落塵網中、一去三十年。羈鳥戀舊林、池魚思故淵。」とあり、「歸去來兮辭」に「歸去來兮、田園將蕪、胡不歸。既自以心為形役、奚惆悵而獨悲。」とある。
- (9) 注(4)。
- (10) 屈原「離騷」に「恐鵲鳩之先鳴兮、使夫百草爲之不芳」とある。
- (11) 『樂府詩集』卷三十四「相和歌辭 清調曲」豫章行に「古今樂錄曰、豫章行、王僧虔云、荀勗所載古白楊一篇、今不傳。樂府解題曰、陸機汎舟清川渚、謝靈運出宿告密親、皆傷離別。言壽短景馳、容華不久。傅玄苦相篇云、苦相身爲女、言盡力於人、終以華落見棄。亦題曰豫章行也。豫章、漢郡邑、地名。」とある。



- (12) 『大明一統史』卷六十「襄陽府」に「太嶽太和山、在均州南一百二十里。山有二十七峰、三十六巖、：三潭、三天門、三洞天、一福地。初名仙室山、又名太嶽山」とある。
- (13) 拙稿「徐禎卿の『文章煙月』をめぐって」(『漢学紀要』第十六号、二〇一四年三月)
- (14) 注(4) 参照。
- (15) 注(4)
- (16) 拙稿「徐禎卿の『談藝錄』について」(『大東文化大学創立六十周年記念中国学論集』、一九八四年十二月)、「『談藝錄』にみる詩の理想」(『中国文化』第六八号、二〇一〇年六月)
- (17) 拙稿「徐禎卿の『楽府』について」(『中国文化』第四〇号、一九八二年三月)
- (18) 拙稿「徐禎卿の評価をめぐって」(『漢学紀要』第十三号、二〇一一年六月)
- (19) 拙稿「『談藝錄』にみる詩の理想」(『中国文化』第六八号、二〇一〇年六月)